



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 JAPAN

和漢文擇焉之七

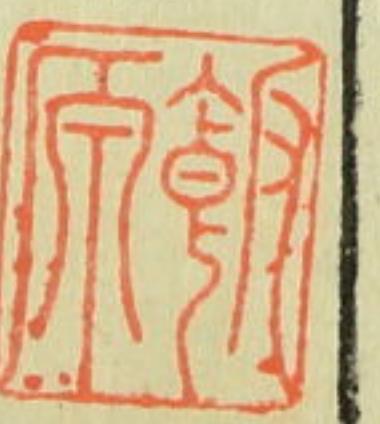
○銘類

鑑塔銘

並序

蓮一房

陸山文庫



竹歲享保丁酉，秋八月十六日，有當先師
亡名之七回忌，則構一向四面之墓耳，而
祠堂曰文星觀，居謚名曰梅菴佛，歷然則
此塔之原鑑也。圓直一尺二寸，而面余者
厥今之謚名，背亦有令誌。年與月，因矣其
地者，令造立。義濃國山縣郡之輪山之西。

北黃山禪刹之塔頭梅泉庵之西園止乎
山者從本備水竹之奇蘿而先師一家之
菩提寺也抑謂文星之意者出一行禪師之
一掌經而天文星者我師之主命也其頌
曰金遇天文秀氣清滿腹文章錦繡成云
然則我師之所遊文章天生文質而非吾
輩之可談實夫鵠月花之折也則憂雲
神助之揚玉耶祖翁嘗稱我師之文學而
以彼之文章換我之俳諧則我者可遊文
章彼者可狂俳諧與有人靡有年榮之遊

品而文章者夙起而之起卧能諧者交人之
好惡則也抑社見雞波之遺快了則文章
及故者在武陵而乍預於風之文庫可仕
我師之點換與乎誠思此等之遺余則今
惟讚文星之二字而可不題祠堂之面門
矣耶梅菴佛之二字者乍師之標號不舉
而鑑之至用也人之視之愛立人之視之
憎之憎愛者唯在人之軒醴而鑑者從本
無心也則爰建置一面之鑑塔而世久將

穿我師之本情與也率哉錄先師之行狀
則入學者延寶之始也采其頃詠山寺之
紅葉述哉入序呂波之詞而序鑒音勃之三
尺名者卒漸十一之秋也來夏堯俳諧之
臍則左謂之十六年矣斯而不撓世之上之
是非莫考東華西華之名而東者無松鴟
之侍人麼西者踟躕之不知浦山而潛
身於憎愛之隅了則置心於虛實之歧矣
季葛松韋年有繕俳諧之波毛居續五論
布局調俳諧之率情歷其外夜話云日記

云十論者增而幽白馬之眼藏而論俳諧
幽諧之有差別古今事了則從矣儒仙
老莊之龐学者咎詩歌連俳之幽出習當
時粉底茄子瓠子之宋近而不令其齒肴
其衣假令可互我行之荷擔人麼古毫者
鉢口新輩者歎耳而憎愛者例之幽究時
竇矣在有不察建立之意地相手鑑之
鞶坊而認虛認實則也爾有則從彼忘此
從此忘彼也則千歲之先者可拜彼人千
歲之後者可拜此塔矣夫

銘曰

鑑本無相
風吹虎嘯
可魚遊
文章難操
同見如礎
交和千溪
曾家無假
勸溫甘竹
孔門有麥
心同似金
錦繡易綺
不負擇林

其虛其實

棧鋒凜々

○註曰△輪山六情浦、岱双屏、△御園、麻姑之輪、
四神の山、帝亭、△天子の宮町、△通夜抄、諸
表ニ出より△黃山、△北野ノ刃、寅ニ在テ山ヲ雲蓋ト
セイ寺ヲ大智ト云フ、鷲見、義作守、建立ニテ、玉浦一派
ノ本山す、境内ハ七万五千坪、△所々三十景、名ヲ
備フ、雲玉園、寺内ノ裁園ナ、塔頭ハ十二坊アリテ
梅泉ハ其一坊ナ、其名ヲ下谷ノ清水ト云テ、一郡
無双ノ麗水アリ、蘆ハ總テ竹ト松トナ、△一行禪師
公言、高僧傳ニ在テ、古文ノ知識、トソ、一章經ハ、禪師ノ
作、三、僧家ノ才子ラ、美良、時ニ其子ノ吉凶ラ定ム

書ナリ始六余官國ヲ出ニ次ハ十二星頃アリテ文星
ハ第六ノ至余ナリ題ニハ仙道天文星トアリ其頃曰
余遇天文秀氣清聰明智素意惺々田中安
秀身清古滿朕文章錦繡成ル

其謹星主余聰明伶利學識愚人作事和善
若達貴福藝相助者定五子鰐頭獨占
東榜登名金階玉階之人也若得權又者
文武多才乃五上余若遇破厄孤驛及犯
重者乃多孚ヤ成不辱書美文墨之輩
五子雲游湖海之人上乃手藝術士之下余
擇入三貴福以下孤駕三子九字ハ仙道天貴星ト云一寒
道天駕星ト云一十二星ノ名目ナリ去ル八年月日特ヲシテ

掌中圓ヲ筆へ画ニ或ハ天貴告星ニ遇ヒ或ハ天駕凶星
ニ遇フ圓ヲ筆ルニ師傳アリ細舉スニ暇アラス ●長恨歌
天生麗質難自棄 ●謝天運傳嘗於永嘉西
堂田心詩竟白玉就乞其夢見雲心連即保池塘春
草生丈以辱常云凡諸有神助非吾諸
今論尊韓叔難波ノ遺狀七通アリ中ニ擴折一段遺物
覓書ナリ才五ノ書ニ一文もよみぬむかハ枚向えヌ
文ものくよき翁へ支考である既接し △文星觀之字
ハ擴額三寸綻桐三絢青ラ入テ文星齋ノ篆字ナリ
筆者八賀金城三間フル富田太橋ナリ本ヨリ歐子ノ名高
シテ古篆新篆ニ季ニク或ハ八分韻府ラ著セリ
△極私佛ハニ子ハ草躰ナリ和泉ノ青石ニ白河石ヲ以テ

臺トスニ童ニテ五尺餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナ
城モハ井出家ノ嫡統ミテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ淳夙坊ニ
住メリト卓筆不羈ノ凡人ナリトソ ●伊呂波ノ威ヘハ狮子
庵遺稿ノ夜詰 痴むくにありのば やすもせね葉
とづくへ色もまよひてちりやうむまふわくに
仰拂ヤクモ脛山の音モアヤシ秋風と附モテ
さりと我腹丈の古風と子細細しかくらむトモ
孟母うなえりもけむあれトテのめぐくとせむ
又覺もやへそアサヤトヨリ梅スルニテ夜詰ハ祖翁
遺訓ニ我滅後七年ニシテ能詩ノ上手モ出キ古事ナリト
宣王ヲ其訓ノ評詞ナリ△滕王閣記勅ニテ微金下
書生云々云々微金トハ疊部北背ラムヘリ 本朝文鑑

十名說 东うあをふ付と東華坊とつひあうあをふ付
西華坊とふ華レ子とん宋モウ宅トアリ其始ハ東菴集
トムイ西菴集ホトムル東西ニ集ホノ名據レリトソ △侍人モ
子知モ古歌ノ裁入ナカラ不知火トハ幼年ノ私詞ナリ
△菖松原ハ奥丹行脚ノ俳諧ミテ△續五論ハ幼年行脚
ノ遺訓ナリ續辛菖松原ニ續リトソ△東西夜詰ト
云イ白紙日記云々何モ俳諧ノ附方ナリ△俳諧十論
ハ芭蕉泉ノ大綱ミシテ白辱ノ尊文ヲ舉タレハ佛家ノ
正法眼藏ト云イ涅槃妙心ト云キナリ△鑑真景坊ハ六篇
ノ結語ナリ 指ス三十論以下ヨリ認虛認實ニテ十論
一部ノ註釈ナヤラ儒俗詩歌ノ傳承貶ラ断リ丁點坊ノ
二字ヲ取テ例、言詔ラ散シタル説文計諫諫ハ更三言ハス

微中解紗 絶妙ト称スレ千歳ニテ玄經ノ取憶

銘解

△魚尊ノ對ハ詩經ノ取意ニシテ魚文尊ノ天遊ヲニヒナカラ
魚ト鳥トラ自他ニ成ケル等寺ハ搞揃ノ筆力ニテ格六鑑轉
ノ絶妙ト称スシ或ハ折林トハ夜間折木鳥將_ト墮トスル
例ニ古語ノ取意ナリ △文玉章錦繡ノ對ハ一掌經ノ頌文
ナカラ雞易ノ二字ノ傳ヲ見ルレ △曾日射ノ對ハ顛倒格ナリ
孔子ノ道ハ曾參ニ傳ヘ曾參之子思ニ傳フ伋ハ子思
ノ名ナリ 按スルニ此一對ハ祖禹禹之東華方アレト蓮ニミ
子思ナレト銘有ノ辭美ラ演ナカラニスラ以テ四合ニ
對セル顛倒ハ例ノ常法ニシテ文ニ錯綜ノ絶妙ト称スヘシ
勸懲ノ對ハ字意ノ傳ナカラ溫厲ノ寔ニラ足セリトスルレ

○ほ云は終とひねて歸_ト下承所のを卒_トあ
キモ_トを往_トす御_トも_トは_トゆ_ト不_トか_トの_トち_トわ_トび_ト九
門_トノ_トて_ト百_ト世_トの_ト名_トも_トと_トじ_トじ_トよ_トく_トじ_トや_トも_ト命_ト
ハ遠_ト緒_トの_ト秘_ト記_トち_トり_ト也_ト詳_ト々_ト今_ト下_ト宿_トの_ト古_ト文_トと_トほ_トと_ト
今_ト階_ト古_ト階_トの_ト名_トも_トと_トじ_トき_トと_トひ_ト破_ト厄_ト孤_ト駄_トゆ_トと_ト
凶_ト星_トと_ト達_トも_トし_トも_ト尋_ト術_トの_トも_トも_トあ_トて_トせ_トと_ト
我_ト作_トの_ト文_ト章_トと_トも_トと_トへ_トう_トた_ト禪_ト作_トの_ト掌_トと_トも_トて_ト
さ_トと_トへ_ト他_ト譜_トの大_ト掌_ト師_トと_トて_ト之_トも_ト也_ト

瓢銘

並序

天章吹

世間_トよ度_ト小_トの_トあ_トと_トほ_トも_トじ_トう_トじ_トム_ト視_ト聽_ト言_ト

の三歳より三足の猿と號を定め、視る聽る
言するのあちらへせれうやまにどうて禍
の門あれど、廢寺廟はれど燐くまでも國の
モモレキとやうへ言とほよむのせぐれよへ
ちばくおれくとせ近くも關に隣とすおへ
ねどく居ます。秋の風とく御あるみの歲
あすきや年ひとくと歳とどあす耳と目と
あきゆの歲とて、萬有万色とがまくらひ
ぬるるあらわすがんすとくと死言ひやまく
そくとげてあらうとすの間のがれと今す。

後より他者と比て他人よりあざとさをひ
きとあうと言はるといふより自己不自社
とかり入れて不祥とがてひあうと在る
の軌ともとがりをねの歳とくと年も

鑑

輿とくと津と用ひて耳もあられと、繫^{ツツ}而
不食、やしそと自慢の所はあれどあよいもた
名よくあらかじめとくことほもとくや
輿とくと津と用ひて耳もあられと、繫^{ツツ}而

○嘗て激され駄とからり虛る。浮
され虚らすとての用あらず。
瓢とく。許由は鳴と博かく。空也とて。写
も。さうやう韓愈うな達とおもふて。そ
れに門ねどよまふれて。まゆる
秋のもじもみの神。とまつて。まゆる
スのたいあんし。すきすきの小さんじ。ひ
歎へやうつて。ふ化音の口説。ごまわせ。セ

○註。四△視聽言動。西蔵ハ前ニ出たり。△家語。觀周
入太祖后稷之廟。有金人焉。象緘。其口銘曰。之

慎言人也。中畧口是禍之行也。△閔口聯前云。ア
△論詣異端。註當如。富声義色。以遠之。云巧言。ニ
字モ論詣ノ詞ナリ。△銘解。△論詣。吾豈匏瓜也哉
乎能繫而下食云。△許由瓢ハ隱逸傳ニアリ。細举
ニ及ハス。△空也ノ鉢和ハ高僧傳ニ在リ。細举ニ及ハス。△韓文
送孟東野序。大凡物不得其平則鳴。以尊鳴。春以雷
鳴。夏以雷鳴。秋以梅。斯ニ一段ハ鳴ノ字ニ言詣ラ形容セシカ
韓子ハ神鳴ハ憎愛ノ結ビテ。等ラ文中ノ文ナラ。漫矣
筆端。鼓舞ト云イ。傍ニ筆。古ノ絶妙ト称スレ。△莊子。魏王
貽我大瓠之種。我樹之成。而實五石云。△釋詣。指故。ヒ
風。まうと。と。誠伊達。ちり字。考の。せ。持。まうと。根也
○浮云は絶え。克己の事也。まれに一葉の称ナリ。ア

様と祝辭言のこと起て歎言の子と稱す。アリ
祥と吉の嘗とある。一作名と越の福井と庵
と能登と一様の音ひあり。此と天井より有底窓
と称す。モロコシ昨夜庵ハ志年のおもひとれ

俎板銘

岸昨襄

日新[△]月古[△]
豎象[△]一[△]午往[△]
之日節[△]獻鶴[△]
憲王何遠厨[△]
子攘[△]羊隱[△]父[△]

朔云[△]下晦[△]
橫準[△]四時曠[△]
七種粥[△]嚙芹[△]
孔子赤[△]字軍[△]
臣亨[△]兒[△]饗食君[△]

抑^{フサ}體^ト身^{ヒト}欲^{アラヌアント}滑^{スル}
錄^{ホコ}弟^チ頻^ウ令^セ卿^カ
天^{アメ}金^{キル}鬼^ル河^ク豚^ラ
争^{アハ}忘^{ミシ}葛^ハ弱^ハ鑄^ラ
寧^{ハラ}識^ヤ無^ハ絃^ラ趣^ラ
所^ニ貲^シ而^シ且^ツ有^リ文^リ
註曰[△]書經湯之盤銘曰[△]新[△]月[△]新[△]按[△]此[△]發[△]詛[△]俎板
自用[△]六[△]藝[△]暗[△]元[△]云[△]ハシトテ[△]新[△]古[△]ノ[△]ニ[△]子[△]ニ[△]カ[△]ヲ[△]添[△]エ^リ[△]論[△]詔[△]亮[△]
吉朝[△]歸[△]羊[△]八[△]俎板[△]銘[△]寄^セニ[△]テ[△]夏[△]六[△]晦[△]朔[△]佳[△]節^{ヨリ}年[△]月[△]時[△]
ノ[△]日[△]用[△]ヲ[△]見^ル[△]レ[△]△[△]之[△]日[△]節[△]ニ[△]鶴[△]ノ[△]庵[△]丁[△]ノ[△]夏[△]ハ[△]奉[△]膳[△]オ[△]ノ[△]沙[△]佐[△]
ニ[△]ヤ[△]尋[△]又[△]レ[△]△[△]七[△]種[△]式[△]ハ[△]舉[△]レ[△]△[△]及[△]ハ[△]△[△]孟[△]子[△]憲[△]王[△]章[△]庵[△]有^リ
肥^{タク}肉^云宣^王立^宇君子^處庵^厨云[△]按^{スルニ}一句^ハ孟^子三毛

卷之十

三

△論語山梁雄雉時哉○子路共之○嗚而作稱也ニ
此一對ハ雄雉トハ雉子ノ雄鳩ラ云下邑弱ノ連綿ニ對セシ
トテ論語○嗚字ヲ假ナカラ雄雉ト一名ニ訓ニタル也等ラ
摘語ノ絶妙ト称スレ
曰但識琴中趣○何弓絃上声ニ云△論語質勝文
則野文勝質則史文質棟ニ而然後君子也
○説云此殆ト亡句十韻アリテ文欣韻のセミモト
カクアリシル韵礎とゆもらひトシテ角川ノ漢文
アリテ是も私家之傳也ト能作とのモ虎
アリトモ一毛毛ト云爾の称ヨリ云ヒ可也法工
相承の空トトモトウサウタニ、魚も比鳥もと重モ
トウモモ古比弱のまいとぞトウミニ風所の熟ト

もかやまとと書て文所貯板にてあると見え候
室とあらあらりと能造の處とあるて是を
我の文名ととづいてまし

本箱銘 並序

菅伸冬

久くよれ天せと文庫にて中に内に内に
かくこれへ一およつてはむりうねても写へて
あこもテと一ノ席のうり悪くとも一あくへ
ゑんとまこととてはくと六藝の名に
あくへ玉とて傳とつひ伊とつひ詞のをとくの歟

丁午松の筆の筆書きとあわゆきとあわゆきの
おもあらちとす桂のすれまくとと油の様とつと
あくと前書きのやうとひととて松の
石を玉ねりと達て大所と臺疊レニと根古木とす
亂とせすの跡とじつととて玉とすれ一とくとお
のつすとすとがおのけとあわゆくとせと降をう
けはとあくとて脇せ隠くと樹とひり傳書仰ゆる
はとれとゆとよりとおとせすとしととくと
眼とくとせすとおとせすとしととくとしと
あくとくとせすとおとせすとしととくとしと

あやめこまことく

其銘

智高とゆきう度の御
松の玉うちけとまつりや 桐の葉あそび歌ひやうく
机の木の日とらすとひと おひかのいろはにへて
曾般うそせ持しけども 竹田うれしとすく遊ひ
我けふれむわざわばとむ まじよほくとくわざわば

○註曰△平文子万事帰_ス一云碧岩錄万法帰_ス一云蜜雪
故東ハ前ニ出たり △達_ナ六門集_ス心傳_フ不_ハ文字

金書、郝隆七月七日仰_テ庭に臙_ス腹中書_フ云
其銘△丘子_カ蝶_シ夏_ニ明_ニ出_タリ△野詔述說、勸學院、崔
徽_シ求_ラ囀_{ルト}ハ野詔ノ說アリ或_ニ云崔_ハ邵僕_ヌ鞞_ナ名セトモ
或_ニ云學院園中_ニ有_ガ黃鳥_ハ口_ニ聲非熊_ハ四字_シアリ
△淮南子_ニ曾_ハ般仕_テ楚王_ニ作_ア云操政采_ラ云△竹田ハ倭朝ノ
細工人_ニテ_ミ和漢_ヲ對_シ草_ナアリ△倭語拾_フヒ_ト
の則今_ハ草_ナト_ニ盛衰の变化_ト以_ハを_スの血_シ也_トモ
○_ニ呼_ムは_シ落_ト隠見_の事_ニアリ_テ虛_ムと_シて寢_ト而_シ起_ム
あらかじめ_シ落_ムの不_ハ傳_ハ者_ハ和漢_の書_シ籍_ト實_シ
あらかじめ_シ落_ムの各_トが_シされ_リ也_ト此_ハれ_ハ達_ナと郝隆
ひくまと_シのモ_クの社_ナアリ_テ用_ハ持_トと_シる_ムも_シる_ムも_シる_ム
ハ_シモ_シや冠_ト剣_トの錯綜_ト削_メ入_シ室_中の刀_トよ

文部書七
一作者と音申すて別に木牛鬼と極手と尾城
の八角觀と所謂て書とよべし金とよくを産
名と方能磨と云うりむ

巖取銘元治ハ謎文ナリ評註
六及八獅子庵=五寶ノ其一ナリ
苍山とえらまくあらぐ
玄とそつりてく所
松子老人

蠶打銘 盒序

かねとお物のをゆきる寶と云ふ双六

晴一秋

とありひきとれん鎧兜とありひ古刀がくあた
もととひきくちた人と殺さんすとさふもとく
やくもとて防ぐとよろずとももちりて奉毛
長城と一組のやせ油ひくわらひくはなは
ひにのまとせうて△魚とくわくし酒とけもひと
前とと樹とわいやまきとせよへ鷹とく圍碁
とくちくても柄とほきあるとも家あくひ
あ△政陽廢と種とわう△櫻枝のまと櫻打
とうら△炮烙の扇モクとめきてまくく櫻
たくまむとくら△軍と社席シマツとぞれ門の

敵とあきらめコトを行はる譲りとアリて
ありて社石とすあきらめやうふを法炮のひそ
と譲りとすまや譲りとすゆる事多
まれどもも柄ノ行て

殺すあれ敵とゆゑり
打すあれ譲とすゆゑ
胡ノ兵不にちりやと
與叔克己の名あり

○詰曰ばれく竹孟とあれはゆくちの寒とされ
撰もすとラホ擇スルニ而對ハ嵌包ラ見ヒトムニ

鳥ト寳トノ字ヲ對ソ倒烽ノ絶妙ト称スレシ▲天氣長城
人跡キ史記ニ出タリ△一炬火ハ荷房宮賦ニ在リ姓字
ヲ憚トハ和訓習俗ナリ△論語釣而不綱弋不射翁
△庸慎其独也△憎蠅賦ハ欽陽公ノ作ナリ夏
ハ厥ノ字ヲ称スレシ△家承詔其征也還ヘスナラ仲社帝之
上云△與叔克己銘凡厥百生均是氣同歸胡傳
不仁矣ト

○ほ云此銘と鹿苑の高用アリ欽陽云不仁のニ
字とかも厥の二字と源詔ナリ伏采の三字と
堪破まテ一あくた喚叔克己名と敵味方の用
あり其名の呼みとあくた格ハ陋室銘アリ作者を
尾城の文官アリ大崎年の逸士あり矣

倦室銘 盒序

芭蕉翁翁

まの麻耶ひくひくひくひく
秋風さめかわく竹を
ゆきこにうへ妙觀がふとがひくゆけと
えり行ときくうてまじくのゆとあひるくまのう
あられにとねにわくく巧ほくあられかおと
ほくつかもとあくた狭とくわくすくとく
えうきねく信とすれどきとく色とくとく
墨がくくとくとくとくとくとくとくとく
それちかちかちかのうとくとくとくとく

あと落葉のさひくゆせとくとくとくとく
はくまくがのうへかくくらへうあく
つゆく一みくはゆのうとくまくまくまく
まくまく。宮样のあくと供はれかく。葉にうすあだね
とやひじとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ありあくい。宗祥の叶ぬあでひかりのゆくひ
とうれりてうくまくまのうらよしきむ

まゆるうちくに
宗祥のやうの哉

○註曰△竹取翁ノ古文ヘ万葉ニ長歌アリ奉ルニ又父兄はれく
よしや就つがまありシムトモ也とあり △櫻葉お
りもむらりゆうもゆうもゆうもゆうもゆうもト云て其詞
ヲ互照シテ次ニ西行ヲ出スキ断續ノ事ナリ△富貴西行
ノ皇國ハ蜃師ノ泉ノ散客ナリ△東坡カ戴テラ△富貴西行
ノ雪中園ハ和漢ニ多レ○たゞと之詳也ノ事ハ前ニ述
●詩仙叢語ニ云△童吳天雪屐、希楚地花。○京能
名發句也△あゆるすまに河のやうう哉

○ほ云け経を詠風ノアシテニテノモシヒも
さりとえ祿甲戌のる伊賀の西蘿庵ヨリア
文詒す二篇の再授あるト云け経の一篇セ
られト達行の後詒ヨリアシヤ松風の達文とテ

傳角の廉抹を論エキシモ夙國う派船葉のき
ハ簾拂舍ヨキトドリテ人ノ信を一々じうほまく
キミニ古文のヤクシヒアキニキトヒ自足の遺文
アホトキトキヨモナシ財ト供給の指あたふ
もわゆん國後の壁論をけあすとモトトキモ
ちテ室のうらアおちよハ祖義の在せアアシト
伊賀トウマシナのねりアシテ岩束たどととれて様
アセシナのれモアリタケトテラシナのりゆゆとすモシナ
有曾キモサセシトケヨ御京の孟耶觀ノトコアレ
道場の名トナシテアリ洛の配主トモア供給の室ア
或ヒ武の名古傳シテアセキトビ經典トロアリモ
と御の御船集モトヤシ共トモア供給トモシトアリモ

羽の事も早と傳する汝肯七う御物をりまつての内古
とかしられむ事の往々あれハナリ薩滿の用と
あれば色

鏡鏡銘

而何仲

原夫世界之始有無鍛冶鑄物師之臺焉
了哉天國地方也了万物各莫不與質含
德事皇矣中下磨謂鏡物者傳傳仰神之
魂而遠照國家之政兮近顯君父之道兮
況向明暮之鏡而男者持髻之不暴心則
方磨嗜同許之有塗敷孫而霖死起死松

之ニ葉成月出度御代之媒了矣斯者和
五倫之中了則宴慶謂鏡之天下一高室
抑從正月之重鏡五九添月日之光了則
不失四季折々之望花尔有冰之成鏡了
鳥尔者翟之宗最吁孰若不臣风雅之便
欵者但闻儒门之孔夫子者七十而从心
所欲无违建置明德之鏡而若繁之任達者
不直麼樂而不淫乎哀而正傷乎程子麼
所謂虛矣不昧一則可謂孔子無能諦之虛
實矣耶初又佛家之教世高懸置淨玻

瑣之鏡而含眼地獄極樂了則八万太龐
廣五百羅漢廣厚八寸四方之翁被照
智惠之鏡而唯心淨土了已心弘陀了去
此不遠與所知夫神國之天照皇者生給
白銅之鏡則被鳥居岩戸之神樂而移給
千心眼之鏡居矣龙首者万之神遊建有
面向佛優之歌給則歌人連奇之宗者不
知佛諦命者供神酒而不崇鏡之御影正
耶乍左有入道者懷入一寸之鬚鏡而客
者所見其鏡了矣省所善忙指弓額般之

連々波也。鏡之山麼近了則耻走雷森之
名而墮後而鬚廣不拔增而可眼儒仙之
奧義探神道之秘密耶。蠻文了雪且了仰
花味月而至毫毛之用心而己也

○註曰老子經天地之間其猶橐籥乎虛而不屈動
而愈出云橐籥籥八吹革十九天地方圓八前而出
天下一作十八鏡裏銘三字其六銘古风称赞父
以下之章三五倫ノ裁断見于上。○在后集章之
會うむの後とあるゆきちよかくもやくりうこつに
擇五字六和三真名ノ用ナリト云シ假名水之鏡
上續う故ニ次之鏡ニテ花之鏡非又真名ニ成字ヲ

以テ水ト鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花之鏡トハ成セリ去ハ真々各
伊勢物語人爲被知ノ歌ノ半亦彼ニ不不ト墨寫
ノ差別アリ但シ原ト矣ト矣ト文和詞ニ勘アリ山亭ノ我影ヲ
見テ其鏡ニ舞フ古又ハぬもとを予子ニ出たり細峯ニ用
ナレ平章ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ凡雅ヲ云ルナリ論語七
而從所欲不踰矩大學子道在明明徳云論語
綱常紅葉不以爲著衣服紅葉近於婦人す子之
服也論語閨雎樂而不淫哀而不傷云詩經閨雎
ハ夫婦ノ中好ま喻トワ大學明徳註程子曰虛美不昧
以見衆理而應万丈者也梅スニ批結語程子實字
ラ讀ントテ強テ我宗家ノ虛字ラ舉テ明徳ニキナ讀又
ト成セル例ニ能諾ノ意地ト知ヘ淨琉璃鏡ハ佛經ニ

出テニ世通達人喻ナドソ接スル流起詔ハ眼拂ノ面景
ヨリ少翁ノ二字ラ形容セシニヤ法ニ隱見ノ絶妙ト称スレ
△す四句トハ心ソカオナリ唯心モ已心モ他用ト知レ接スルニ
句ニ大和ノ真名文ニ句讀ノ設アリ是ラ漢文ノ字配ニ
云ハ被照ノニキナシテ爲入ノ上三置キラ和訓ハ詔路ノ
虚アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ヲ八
字ト成レ下ヲ七字ト成シテ句讀ノ長短ラ配ナリ此等ハ
大和ノ新制表ニテ例ニ倭文ノ圓曲ハ返亘ナキ故ニ和漢ニ
音訓ノ差別アリトソ前撰白花脚毛木血花無配アリ
比丘尼ノ句讀ニ至見スレハ唯心モ已心モ降土經ノ詔ナリ前
アリ△去忙不遠玉前ニ山山タリ合本紀乃後考手持書
白銅鏡則有化出之神是謂大日靈薦大日靈

天照皇ナリトツ▲岩戸ノ食モハ照鏡モ前ニ山ナリ△御部
廣成古語拾遺八十一方神於石窟戸前度燒
巧ニ作ソ佛優相與歌舞云能優ニモハ優出
テ滑稽音ノ優游トツ▲鏡ノ御影ハ翁等在リ天神
自翁ニテ神酒ラ供レハ色ニ山玉フトツ拘念此詔語ハ
岩戸ノ鏡殿迎ヨリ御影ニ神酒ラ結タルハ翁神ハ
本音凡雅祖ニシテ神裏ノ和光ラ萬事カラシヤ翁六代等
ノ文法ヲ双国ノ絶妙氏互昭ア好辭氏称スキナリ
△此れノ事は元キの二時行あるば後とて御がもの
元カトミトモウタヒトニ般詩詞、御宿を後トテ御
奇と呼ムトモトソリ○羣族ニテ後もアモトヨリ
アモル事有ル物を考究アリ○今主事集がアリ

後のれど下へたるゆゑはけども
二句ハ正季ノ用すう爲唐車胤カ学文ニ寄セテ儒佛
神ノ守道ヲ粉底シトス例ニ佛丈ノ意地ヲ知テ龜毛ノ
二字ニ看破スレ

二字ニ着破スレ
○豫云は名を虚空にれりテ大和ノ直木をより體シ
ハもひきも後モ一キタリセモ其と蓄用と云ふ
或を和訓の子と云ふ者也而漢の長短と云ふ者
と直木の詮用と云ふ者也一其の移りて後學
の神と物と曰ふ者也而傳仰の二義也
せうにわが身と能くの謂利と云ふ微中解説
アミナセ作名と仰する謂利と云ふ微中解説
の内味あづか命

○傳類

竹夫人傳

三良靈峰

むしに此聖跡の字號と定められたのひくら始
錦帳のうちからぬあつて御上巻の事とまづと
四年の庚子年五月廿二日正午の方の朝氣森
神の名あつて御上巻の御縛と云ふて
あつて御上巻の御縛と云ふて御上巻の御縛と
あつて御上巻の御縛と云ふて御上巻の御縛と
きつと十六のある名をもて鏡とすんのかく

あひ錦の音めうきゆりひれて早とおにく
にあとすをかと下の名をよきわくとよの比
較のためとてあとちる敵のたゞくるを賣
の媒えとてお敵様とあれまくとてや
くらむすの美善寺とてやとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

文獻卷七

鬚の間等と忙がる事無くすれども、
冠者たゞの事。穢毛眼蟲と竈とある
モノに薬局の了りが付け用ひ
あれば薬局所の事。龍たゞよめの事。
おおむね一處の事。然るに薬局の事と

○誰曰竹夫人ハ抱鼈ノ言名ニテ卧内ニ嘗テラ避ル調度ナリ
或ハ竹奴トモ青奴トモミ一リトツ ▲羽碧湖ノ空也長高
竹生^鳥ノ聲入天ヲ指テ竹夫人トノ寓トス城等ニ傳記
文用ヲ知レシ△矣矣ハ猶張自ナリ傳ニ之字ニ用ユ和訓
公文^{タト}ニ意トソ△白雲^{タト}歸ハ東坡^{アリ}詩ニアリ矣ニ云子
カ通向有^{ナリ}御^{ナリ}見ル^{ナリ}△竹^{ナリ}之ゆき^{ナリ}娘

とわくむすまつるあり。かく事ノ歎。前句はづり。今木
竹八十里護す。木公。月二代り竹八十日依。夏トツ室ニ六月
ノ富名ナリ。△潭丘王墓。三ニ歟武黒文將ノ諱也。アリ
肉。六十ト今ノ放空寺ナリ。△美客寺。ハ漢武故夏ニアリ
前二山也。○後撰集。秋風の吹き止む。シテ久
多。事のあらざり。言ひとむ。カ。●斑。扇。怨歌行
ハ前山也。△長安ハ漢土ノ都ニテ帝都ニ和漢帝
ヲ對セリ。山谷ハ童貞。直。櫛。号。ナリ。石牛。同。魯。直方
別墅。ト。○山谷詩佳。趙子亮。示。竹夫人詩。蓋。涼。宿。懷。竹
器。鶴。臂。直。脰。似。非。夫人之職。予。爲。名。曰。晉。奴。並
以。詩。取。之。穠。本。四。絃。風。拂。席。昭。華。之。至。九。月。侵。床。
秋。興。紅。袖。堪。娛。夜。政。西。青。首。奴。一味。涼。△萬。童。寺。下。寺。

○語云此作と全くく寓言かうすすようすく竹夫人
の業本を成りて今毫厘の進退ともとどり角の
れ連と信まつら一萬冊の移する所へよき事
の如きとソリナリをよめのとふうへ後よりと
長安の市とソリナリせむるよ臺山翁の二子と
あれ一萬冊ニ及ぶてえとと聾ととの肉ちと
ソヒナリといひ音顛の異病とソリナリ對子對
ソヒナリ文對の子セ一格ソリナリと隨對の龜
鵠と下作翁と深山中アリて賀の金城也あはせ
あり越の石野上卿官主と良と姓アリ壺峰
とある名とモ書ては覺の凡士あらわせ

瓦器傳

河何毫

瓦器瓦器と云ふを混て泥の器も云ふて
その名すらくさの性ありせれど天帝をもひ
うそ神祇宗教をして常の宮もあれどやまと
まきりきりせれど人の代北酒器とあらずて薩摩
島のとてスレハ郡草滑のよりて競ひ
ひ能格と云ふていつれは年族ありまよ
矣ふると我がの重寶記より瓦器とかひけと
訓キリカと陶物の也名からされハ和訓と

瓦器のニ字と用ひて音訓の通譜る一と言子保
年中と云傳を傳へたり詳や古事記常闇
ハ一默のひくと後つうてゆ行所の四萬一千けわ
あきかんと和音のねりづくにむじ沒や宗教の
もくと燃灯佈のほりとく貪すれ一灯と
かくさり十二灯と二万灯とづれづれ物
あくてありあもしらてやまちの蓬莱とへゆふきぬ
の跡跡と移ひよももむこ入の眼ふとくとくとく
あとかきりてことなる景石とほくとくとく
一石の傍えきがゆれど手の筋とりまくとく

在人のつうりやもかまくべとむじうゆの竈と
まの歌のまじとままれさればらへられ一いと
往々とてはるる行ふれおもひよかねと一隅の流
川一ノ里とてまづ角て左入るす袖とやうさぎ
あらがひの道よりひりかづかてすすめの處と
あらがひの道よりひりかづかてすすめの處と
萬秋の夕暮れにそよかふりとせぬひりかづか
の道とすしとすいあはうれ達車不をつぐもも
じ方饅頭の感えとてはうめんぢれと世界の
有核非核ふうじゆうせのひとまもとわく處の

ひと一家いふほれずおの灯翁の正大にうけの
葉のとがとくとくとてほたるのわくとせわあれ
ちる早と鴨川の流とよどひてわくとせわに
かうやれとまゆと煙物の歌あくありてきとせ
南京の潔門と金浦とまゆかりのせあくと
せわ常とあくもむと便とくとあくも

○註曰△伊部ハ海前ナリ常滑ハ尾張ナリ摺鉢炮格ノ類
ノ名所ナリ△岩戸ノ窟三箭門出久リ △授決經時有
貪才以ニ一灯一歌作後世祐本特勝諸灯云 ●詩仙
叢話宮詞歎君一盃酒忘臺而年身△之國主
張摩宇文遠勇力過人莫不怖者曰達車不則

小兒止啼タマシテ、張遼ト霞頭カスミノタマトハ例ニ強弱ノ詁諧タマシテ
○ほ云ハシメテ傳タマシテと例の寓言タマシテあらびに從タマシテむふと瓦器タマシテの刻美
もタマシテ神祇タマシテ宗教タマシテ亦可タマシテ常タマシテよ便タマシテにわと訳タマシテさる
筆タマシテに矣言タマシテの術タマシテあうとふをもしまタマシテい思タマシテ神タマシテのあま
あもタマシテもさすよタマシテゆくタマシテぬれ股タマシテ筋タマシテ筋タマシテとよるとも角タマシテ
作者タマシテと見タマシテの度タマシテ能タマシテよ素タマシテて河本中タマシテの騒人タマシテあり
こつタマシテ五箇子ト稱タマシテさうと號タマシテ

葉然傳

東菴坊

とせや堂タマシテとせや人タマシテあらうての酒タマシテを門タマシテあは
と花タマシテとひのとひと種タマシテをすりけタマシテ竹タマシテをみんと

おうりとじ我タマシテとく事タマシテ人のね教タマシテよ敵タマシテひと合タマシテのせり
あくしんととよ、ひよりタマシテとせを勧タマシテいてとも合タマシテと
染タマシテ然タマシテとよとタマシテ一タマシテされへ音語タマシテと大和タマシテのほわもより
万葉タマシテの竹タマシテとおと念タマシテよす一タマシテほるとせとよと
くらゆくこの持花タマシテとあんとゆめやれとよと
一人もうりげてはわざと瘦タマシテかくタマシテちりう床タマシテよ至
とおほよやまと一タマシテこれ詳タマシテよ細タマシテく立タマシテすおと
と本タマシテよひ行タマシテきよくわねとほひ隣タマシテのむね
とよもひようりてもと夕食タマシテの事タマシテよくわくよくわくと
白くほくらとあらうおさひ今タマシテやけゆのを質タマシテ

とあつてやうのうへとまわへがとすめらひゆら
はよて壇界たゞに座とおもひますあくまも
せうちまふにれやへばをむかひまくら
許ゆうれ歎とあわとぞのまの枝えがきやく
かまくとそくられをじぢわとまむらうほんぐ
御の斗およみがくとくとくとくとくとくとく
のあり。吉宗の酒をとどきと被ふ一斗の葉花と
る。あまるとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

物をもとめにゆく
今あらまはれと
やむる又むる也

○説文△音詣トハ文千ノ通ヨリ 説文ノ一名ナリ 砂鉢ト伝
立縁十文イ 鮎ト云イ 錦ト云フ類ハ音即訓ニテハ美
中ノ音詣ナリ 郁久念トハ万葉假名ニシテ郁久ト等ナト
ノ西用アリ 大和詞ノ後勘ニ見ルヘシ △撰集有ニゆうニ塔
豆アリ前ニ出ヌリ △論詔ニ十而有立ニ ●古今鏡取
文也ノ歌アリ前ニ出ヌリ △許由カ瓢ハ前ニ在リ寃ヌハ
出れく 牛の詞ヲ挿レリ ◇李子而淹見國舟ニ多モ之を流
直下ノ詩ニ據シリトワ ●飲中八仙詩 李子白一斗詩而當稱
之冲樽トハ此意ヲ摘メリ ●公子行 詩 借向酒家何處
在牧童之山指杏花村 ◇神仙傳 尺金壺玉瓶ニ奉テ

○ほがは傳を宣起^{アシキ}へ詠説^{ヨウセツ}自立の三事とす新
の一坐と詠諫^{ヨウセン}さうもあた葉然の音詰^{ヨウヅ}る心
せ合^{ハマ}ひくもまじに例のわくく例のまじくえに
羣人^{ムジンジン}と糸殺^{スイサツ}ととよへげりを幕井^{カマイ}ギリ^{ギリ}能名
と様う^{ヨウ}ふきの役後^{エキゴト}を翁^{カミ}て濃の岩崎
と隠遁^{カモク}をうなむ。

讀^リ隱^ヒ逸^イ傳^ヲ

佐其玉

むし^ノ、孤^{カルス}梅^{メイ}の奥^ハ奥^ニをねまふの^ハ世^ト
はまく新^ハ放^ス、肱^トすけ^{アラハ}とほ^ミよ^ハ居^スと
さうと大^ハうりあやまつ^スて^ハの^ハ人^ト

ムを末^ハ後^ハの^ハじ^ハ耳^{アハ}九^ハ尺^ハ二^ハ間^ハ七^ハ丈^ハ仰^ハ盤^ト
ひ^ハく^ハ孤^ハに^ハじ^ハく^ハ耕^ハま^ハこ^ハう^ハと^ハ吟^ハ空^ト
食^ハ系^ハさ^ハせ^ハま^ハに^ハ歸^ハま^ハい^ハま^ハの^ハお^ハ神^ト
一^ハ念^ハ舟^ト起^ハの^ハま^ハ宿^ハ有^ハあ^ハら^ハと^ハ津^ハせ^ハ行^ハる
追^ハ通^ハ者^トと^ハ何^ハせ^ハす^ハれ^ハ天^ハ望^ハ宿^ト
往^ハの^ハ羽^ハ子^トの^ハう^ハく^ハい^ハや^ハあ^ハり^ハ願^ハく^ハと^ハ市^ト
と^ハま^ハ風^トと^ハす^ハて^ハ言^ハ候^ハ肩^ハの^ハ事^トと^ハと^ハあ^ハ日^ト雪^ト
の^ハゆ^ハ金^トと^ハ達^ハと^ハわ^ハお^ハ、^ハ塵^トと^ハア^ハ雪^ト歸^ハい^ハま^ハ
あ^ハく^ハ松^ト花^トと^ハま^ハい^ハと^ハお^ハか^ハじ^ハく^ハ春^トの^ハら^ハ
の^ハも^ハあれ^ハ秋^トか^ハの^ハ空^トあ^ハり^ハと^ハれ^ハと^ハ能^ハ得^ト

の源氏と或と桑とすよもやをもとて
その葉蘿と承くへありゆきを听心の匂傳^ハに
かくれあるにと已ふのせゆゆへあきてて和漫
し人のきよとてうる源逸傳とあこむまを余取^セ也
○謹曰はれく竹栗梅^スなどふとどくありらざる
入らすり竹^スあう柏^ス栗^スみまき^ス折ち下^スるゆゑが
マ往じくあわくちり^一曲肱^ハ論語^{アリ}雜歌^トハ其
段^ノ取意^{ナリ}△庭^ノ相子^ハ栗栖野^ノ結文^{ナカニ}け^レ其
ハモのまる人^ハつねほや^ミを相^スま^ト云^ル其歌
ノ歎^{ナリ}△俳諧拾芥^{シテ}う我^おと^シ居^ス人の事^ハ尋^ヌ
あまあれ^{キタク}麗^{キタク}もの^ハまゆ^ムと^シふ詞^ハたま^スのあ^スを

○あうて^ハ源^スと^シ一^ハ行^スうらうだ△松花^ヲハ素人^繪ニ
シテ多^ハ行^ス成^ス、墨繪^{ナリ}○古今集^秋を^シて月^ハの
の宮^ヤと^シちるひづりと^シとち^シと^シは^シり^一△巻^露
榮^耀ト^ハ盧^生カ故^夏す^リ前^ニ山^出タ^リ△唯^己心^只觀經^リ
詞^{ナリ}前^ニ山^出タ^リ

○源^ス云^ハ行^スと^シれく竹^のあ^ス猶^シのゆ^スよ^シて
和漫^の源^スの源^スのす^シ陽^トシ^シト^シ傳^仰の^シす^シを^シれ
叶^勝と^シる^シむ^シと^シれ^シと^シ傳^仰の^シと^シす^シ
取^捨の^シす^シ接^シと^シは^シす^リセ^リ也^シと^シ讀^ス墨嘗^傳^ハ
こと^シの古文^の例^スあ^リや^シ作^シと^シ従^ハ併^シ
て^シの廣^シと^シは^シと^シ文^の里洞^を先^シ所^の而^シ識^ス
す^リて^シ家^スと^シ代^の凡^シあ^リと^シ也^シ

井童平
筆傳

夫はまことに御心と重力のとく處にあつて
と天降ある起の神ありてせれと稀もせんやれ
ひのれの神とあらきると佐倉の國と名はすが
霞洞と佐世としよ世界とまちのとくあつ
るたゞて白教中古敵あと社ときとも神と
清りしより天あられ彗星とかやさへせに
かかれら事本とらふすかひ人間の用とせの事と
を敵といひて。正等の二事もあれ民間よと

やうげてと車馬等其塵トヤードモシニ 節羽の
云美しきとく年セ吉極ト名とあらて之翁一翁
ハ極とふくらぬがの巣の財とあらき大羽幕
と麻ひまくして革へのむすびはくわく翁
あらに櫻摘筆とよむと山本北園セモカヒ
櫻も桜の葉セモ行先とせらうとらひ庵のかき
やかみけみれと櫻の葉の奥セ軽うよにれて
あらちりんとほよとくらひ庵トトねく彦敷
もううれ馬トキアレつ種くわづれつ不まくよ
ち御席ト性靈の在せまちとよす筆くも

いれまし屋にはあざなのねつを
角宿の途中あくちもあてありて群の事と
あらわとて身をもたらする處はあれあるて石高
の根とがされ軍と何やうのまゝに冷物醫者
らしらねく草薙の年せの間とては彼を
一轍すむたる中と行儀とすまじくひきだ
金とがくのほくと市中とあらあらすめ
ちう秋のやう金とほそめとおとせとおとせ
おとせとおとせとおとせとおとせとおとせと
さくらんとおとせとおとせとおとせとおとせと
さくらんとおとせとおとせとおとせとおとせと

院の居所よばのよつよとしきとがくと宮
けくわからぬと塵のけせとくわくわくわく
の事ゆきと遠くで國はるか年下とまこと和専
ときをとて門をみゆ掃ふかくはるのりひ
拂ふそり行ひうみゆりすかくまつてもよ
くのくのくのくのくのくのくのくのくのくのくのく
へれもかくもにすくえひて主附のたどもじつ
うにゆゆのあやかりてみ膳あわねがくも
あくよとくひのうはせの様をくにきがくも
萬の名と連れまもうちとおとせのとあると

人も筆意の如きありあれ、一ふき二ほどのなる人
さういふれどのありとあれとあし

○註曰。三體詩奉、弔平明、金匱開。詩ハ官事奉
公ノ様ナリ弔ト筆トハ通用トソ。○万葉、物集の物子
の如きのをもくとくとくとくとくとくとくと
△老子經、和光同塵云。△源氏、筆事本ハ才ニノ美ナリ
歌ヲ以テ名セシトフ。△妙葉、秘傳抄ニ極摘筆事古事
ニ繫シテ麻病ノ所ガトセリ。△古碑銘、豈非金石書
而銘者、文乎。○胡詠、より其作の如く。甲は譲位破
けまじめり翁主もあらふ。○はれく。甲は譲位破
つむりたるのをつゝやく。乙もくふを
むじく。○左と沙證互にしむ。アゼガ方ゆづ

ミテのよもかくわんとわすれあくと擇スニセ
句ハ前ニ隠逸ノ起結ト云。イタニ和漢ノ文法シ較系
タル等ラ鎖詞ノ絶妙ト称ス。シニ益譜。寒山ノ常
ラ撫ヘ捨得ハ卷物ヲ持ル細舉スルニ及ハス。○寒山詩可矣
寒山道而無車馬蹤。云々四時圖ハ豈于信ニ寒山
ト捨得トラ旨テ虎毛贍。居様ナリ。豐干貞ハ前禪
ト云。不修乞航。例々能清の寓言ある。
近もと不を人間の浮沉より王公后院をえりてあ
あ。ね官す。左士。りの房せりと。汎諫。とりあうを
一篇の結文として筆。ト轉。雲。の。子。とつい。於
ス。騒。の。諭。ト。詔。と。む。そ。ひ。き。そ。ん。え。と。新。猿。の。奇
法。ア。テ。筆。ト。こ。す。の。舌。あ。り。と。ア。キ。セ

○吊祭類

浪化公終焉記

東華坊

うす御世月九日を和の御事にあらわしきて君
はくされしとこそきりやうれ松と重月のすす
あらせむなりのりもる。一叶君主とあらわし
をさすおぎうちはくわくとあらわせとありすす
そくおぎくとまゆはんとまゆのくにあら
る月のあまぐりいとまゆはくまゆと。次にゆる事
あらわせと市人のまゆりはくわくおもへ

セキセキとまくにせのまく

名月やおまくすけをぬの言

浪化公

名月やおまくすけをぬの言

林野郎

もよとむけよゐのゆひとよむけとまゆがま
てよけむとむけじつたれとまゆせやわら
まれてあつてせはあせとむけのやうあと
まくあくまほのゆひはくほのゆひの耳をと
くすまくとつれとあくとまくと月育
せりおれとあるとあると秋のゆほとあると
山すとあるとあるとけゑのまちあらとく

おうやまをむづきがれとまゆの
おもてやまではあるくよがりあはれと井戸の
いとせかへつむとまゆのひねすりむぢうと
御のまづくう脇見とくらみのむすびあが
さかとのやられよかつて葉をやかみたと
おとやけよげましむねうながすとすば
るやむこのふかとせうとせせのきを
まつめのねえをあうとせせのくわ
あくとせうとせせのくわうとせせのくわ
うとせうとせせのくわうとせせのくわ

おれをよめくにはやとせせのくわ
てせうとせせのくわうとせせのくわ
はまとせせのくわうとせせのくわ
うとせせのくわうとせせのくわ

まのとあくとせせのくわうとせせのくわ
せうとせせのくわうとせせのくわ
はまとせせのくわうとせせのくわ
うとせせのくわうとせせのくわ

はうと今をせんじてうきもあいを
あまくおもはらけますか入る一
の事はうとせんじてからひる地にせん
そめやうに通じてうせんじて
例の人へとふれでゆく人あつて
うそとせんじて屏風をうれせ
ほんじてお車のやせあねのあくよ
う病中とよもとうの事うかまとせ
胡付うゆがえりあひて仰あくむねのか
見えどもあらがいあふまくまくまく

さあれもかくらをさへてわざわざくわぬま
もむよてはうちにとおつとくにけられまよ
えもんとわゆけたまふるまことんちれ
ひきくわやせまつまつめのまともと
さくさくあゆみあんむまきのまとはるん
さあゆめのまちんと圓とまわぐを一かじ
わくへれくわくわくせみよまればればれ
きくわくわくわくわくわくわくわくわく
のいきまのすみやく席のまくらすみよ
へすとたまわくわく(うまくわくわくわく)

とよもていそかのくへりとはくしはるにせれ
とよもていそかのくへりとはくしはるにせれ
斯文とやろわゆとすと熱の人もあげま
さくややまゆとすとがのとほのまゑ方
てかくもせん紙とじよひをくらべてみるるの虚
空とかくもせん紙とじよひをくらべてみるるの虚
きくわせたとくは所もくらべてみるるの虚
とあくうとくらべてみるるの虚とくらべてみるるの虚
あやかくとくらべてみるるの虚とくらべてみるるの虚
湯うな。とくらべてみるるの虚とくらべてみるるの虚

世ふかうあがくとすとへりはくへりあうせん
の三葉とをくへりはのせんとくへりせんのせん
せんとくへりを近くねくねくねくねくねくね
てくねくねくねくねくねくねくねくねくねくね
くねくねくねくねくねくねくねくねくねくね
はくねくねくねくねくねくねくねくねくねくね
やつまぐのくねくねくねくねくねくねくねくね
月宮をくねくねくねくねくねくねくねくねくね
こ跡をくねくねくねくねくねくねくねくねくね
くねくねくねくねくねくねくねくねくねくねくね

まくはるのあひたまとのしげせのをに見てすすへと
かくがくうくおもつてはくはくかのたれど
アカウタリモレシモトガスリヒルアムキ
とおこううりあまくう到りあらそくえもんきよ
ヘキサマムツクアリカウシヨウミサ
アヤウシムヌカムトマサシ
喜びねとけふやまくスアアトシテ。お東省のむれ
らかくまくと△降蓮社の入お△せとちゆのほ
とゆとよ。△おどのあせまひをうと△淳風坊の郭は
ゆんすいわくやまくさりかくとく住むとね

世あらまのあり玉
うかく一室あられ
るをかききりはれ
はすまつゆうとあわ
せよかくのくわ
くもげよせよかく
えれほよせよかく
葉すすめの枝よせ
よかくのくわよせ
よかくのくわよせ

○註曰△浪化君ハ東門跡ノ連枝ニテ越中井波ノ瑞泉寺ニ住シテ
官号ヲ應真院ト云イ標号ヲ應久山人ト云ヘリ。予寂ハ
元禄十六年癸未十月九日ナリ。○行至京トヨリからまに
少人ありへどもゆの角より舟車往来とて之にて
御明本傳佛酒中下王弘内伎。又ア壁上墨陽三酒ヲ贈レト莫

アリ△采花和歌アリ△北河園梨もすくえきゆく△アリ
△金沢ノ別院、安江町ニ在テ井波より十二里ナリ△親方ト六歳
テ津田家ノ智門君ナル故ナリ○通氏相姫、ゲヤミト即ム
名吹むきよのをきく、や萩うりととづらひととぞれとよさう
や萩とく子字ノ寄ナリ男子ト女子ト二方アリ△ゆきどひ
奇書、詞ニ高タシキ古文トワ△亀掌ホ別墅ノ名ナカラ伊勢
万子ノ標号ナリ此公ハ金城下ニ文遊武備ノ名ラ傳テ祖翁ト
頃蓋ノ盟ヲ残シ先而ト亡ニ至ラ結ナリトワ○桔尾花集ト
祖翁ノ難波ミテ病中吟旅モヤモヘアヌトカ秋雨トナリ
大くよとあう△凡雲ノ詞、謝天運カ傳泊ノ遊情ラ殊レル
ニヤ憲遠傳ニ尋レシ△一向宗門ノ改悔詞ニ難行難修ノ志
ヲ振、捨テ、唯一心ニ阿弥陀如来ラ賴ミ奉リトマリ難行

二字ハニキノ夢語ナリ△さるがくハ穢樂ナリ歌書ニ載言
ラムヘリ△論語ニ天之主裏ホリ斯文トハ彼所ニハ儒法ヲ云ヘ此所
ニハ能詣ラムヘリ矣レハ此詔ニ頬回ヤ早世ラ含亨テ裏吾ノ聲
ラ取意セルニヤ△堺花坊ハ洛陽角ヲ十坊ニ分タル其一
此時ノ會ハ長者町ノ去來亭ナリトフ△法師ト車花先師
ナリ同ク祖翁ニ見大セラテ越ノ行脚ノ約束アリトフ擇スニ
其比ハ先師モ七七八ノ年ニテ有碌碓波ノ撰集ニ先師
ノ能詣ヲ趕ニ玉ヘト去來ヨリ内談ノ断アリ其快公崩
遺稿ニ残レリ○万葉人丸辭世ニ石碑存セヤキタはさみ
本居宣長浮世の月と云々ナリ山端トハ復利
伽羅ラムヘリ井波ヨリ西ニ當レリ△有碌海ト碓波山下
一集キノ前後ナリ序者ハ洛ノ去來ナリ△我ニセリ方子ト

西撰ニテ又頬ノ發句ナリ○それをせり旋ひ音ナリ前ニ
出ヌエリ△かくすハ荷擔ヤタフニ歌書ノ詞ナリ△ちもやまハニ
壹早ナリ真名伴勢物語ニアリ○真ノ葛ノ原ニ慈鎮ノ
歌アリ前ニ出ヌエリ其邊ハ車門跡ノ墓所ナル故ナリ△朝雲
暮雨ノ西宇ハ神也興ヨリ亡後ノ面數シ墓ノ意字シ接スニ
其一段ハ越ヨリ都返ノ名所ニ寄セテ比六十日ノ九日ナヘ都ヘ
花ノ返咲ト云イ真名鳥ノ凡ニ計音ノ驛ラムヘル古歌ノ殊言
モ古詩ノ摘詔モ此等ヲ載入ノ絶妙ト称スレ○嘗ニ之聲
音ノ如クナリ之聲也ナリ也ナリ也ニあ(や)あ(ま)ナリ也
ナリ也ニ○佐成娘乎あ(も)も(も)も(も)も(も)も(も)も(も)も(も)
あり体めら夙△處置ノ森下ハ守字ノ寄セナリ古歌ナル
尋ヘハ松江ハ都ヨリ漆塗木レ世君ノ乳母ナリ其比ハ七十

餘ノ老娘ナリトフ ○蘭音戸山ノ一對ハ前書タリ △津蓮
社、井波ノ店外ニ在テ佛詠ノ角柱ナリ祖翁ノ無縫塔
アリトフ△津風坊八十坊ナリ東六条ノ道シムアリ ○次テ
のあやうとヘ靈ノ縁詔ニ聚ノ詔ニ多シ爰ニ住ト須六ト
ノ寄セナリ △豊史ミニ蘭玉樹トハ兄承之称セレ詔ナリ
○説云け太を草ちて嫁奉りとうアリ先所ノ一付至希ヒ
やうりとアリはれ子らの遺稿もよもと全達
の主通とくらべて是の多くをすくよみに到れ、うも中には
駄方子の本ありイタキモ改正記の本ほあくヨリ競ひ章
ス佐翁の云詔セモ本の時よりハリキム所トスアリ
はれて霜の度ハ君ノ終身の事と熟识シテわざ
能作也あとと見てじりり和号達矣セラ

能譜へ写しの新説を以て一章よ戯言あれどもあつて
角引うつし竹とさやかたのみと傳とほせ申ね詔の
艶詞ともいひ在る御席の優れとにくじらて湘月
の道すむかくまもさんとき方のまことかくこと和歌
の若林とくやかくと作法の美言よあそばやスセ
年お處室の花火もくよきよくと津波けよめ
序文とアラカルホホミテ明なの信とくしてあやよおせすよ
聲の事わからずとやみの聲はくらべての声と
ちにくで生れの声のあれあるうちも神とがまき
あくまでねねいの聲はくからずとかりあぐん
和音の聲はくは諸の微言もとあくつけ聞はざんや
おとと音符の連枝ともとあくくみ秋葉とれども

るべし、船換のはあう、虚言を仰のびて、あくまで
之は去年の秋から、此年の春より、虚言のすゝみ、
又貨とけせられ、あくまで、とけたる裏孔達、天さり
と云ひて、や先作の又移入、け類の艶曲も、又奉あり
て、手を拂ふまことあわざれや、もくじ終事へ
かどりやうにかくあれあれと、本練のまをのけ、豊
山あつて、那郊、あゆみと生む、三事と本朝又禮
ともえり、汝が、うらみとほり、年、きよ、あも
とすの文操と再機、一て新流と當用の行みと
あきらめど、と風新の行みと、かくへやくと船荷
の名と、おとと御とま流の塵と、いとと、御と、事
の事と、りひあく船荷と、きと財金のりりや

駕修とあくのき、せぢりと、あん減、せほの
左ゆぢりせほと一部の実、あんと

雲鈴法師行状記

蓮二房

そほくよ雲山嶺は所を奥卅南、郊の素性で
本店家の侍郎、うち、官事の塵とせとて、
旅を武陵と雷轍よ、雷轍よ、とやもく、中止と湖南
とを井の社とじらす、ほり、あと、ほり、あも
ぬと、みと、色と、よ、さと、と、鼓吹の音、おと、
了る年、よし、あゆのう、もと、かね。飲中の謫仙

トモトミヒカドモキハアシナニ詳サハナカニ
トモトウタリモ詞のモクヨトヒルハ裏紙の内モ
アアキモハムのモアヘアヒトチ桶の體ヤヤスル
アリタリトアツマ人ス本直アガリトヨリシモズ
ノ體也人モハシテえ祿ス守比アヒシ通鑑也
シトナリ御也コトは高麗トアリモ圓^ス圓^ストモア
莫濃^スト御子庵^ストモアリテナリ也^スがモ清^ス
一詳^ストガ^スト知^スセ^ス童^ストモニ^スアサ^スセ^スリ^スモ
シハアリタラモハヤシヒニ未^スアリ^ス体^スの禽^ス數^ス
子不^スト^ス東華^スト御^スト^スアヒト^スト^ス

息のまもむれどよかくはうひがれとひ更
へきすり二月二日かまくらの辞を

辞せあり

せかりりとあるせす二月二日を
はなと一えのくじとえあくらの辭をひふる
のうむおまのくやまくらの辞をひふる
と興るべりあるじく人をあく
ト自心をとて辭する色あびきもむだくうへ眼
ねうつてくとめうとやひくとせ善化和高
終至のまみとまげくりや雲中と金の音やまくに
「これが先作の讃文であひて餘のアモトは

アモトハニビ值遇の猪絆アモトハニビではまくく権化の
奇特あんとせよと清よも高とくくとて碑而
洛の渡吾仲アモトハニビ墓誌文と名す

○註曰△雷程子ハ武ノ其角カ櫻号ナリ感ハ晋子庄云△五老
卉ハ湖車ノ小野ノ宿ニ在リ第阿佛山屏ナリ梅等結社
ト六戸山ノ白蓮社ノ詞云△次劉明アモトハニビ出云寺有^シ天^ニ也アモトハニビ△劉明傳
五^シ鼓^シ近^シ掌^シ五^シ斗^シ朱^シ不^シ腰^シ解^シ印^シ綬^シ而^シ般^シ故^シ綱
云々●飲牛八仙詩云臣是酒牛仙云其誰此天上謫仙人也下
云々^シ謫ト八流罪^シ金夷^シ△史記賢士之處世辭言若金
在^シ裏中^シ其先立^シ見^シ檜^シ云^シ對^シ八^シ裏^シ金^シ漫^シ詔^シ和^シテ
福^シ鰐^シ倭^シ詔^シ對^シセ^シ卦^シト云^シ伊^シ澤^シト云^シ包^シト云^シ伊^シ曲^シト云^シル
字對意對^シ更^シ言^シ云^シ雖^シト^シ鮑^シト^シ自^シト^シ對^シ格^シ三轉^シ封^シ

絶妙ト称スレ △知七ハ襄田牛ニシテ洛ノ去志ノ促第ナリ
長崎ニ知セアリト祖翁ニ称セラレ佛將ナリ ○梓弓ニ張
ト云イ引返トモ矢長トモ總テ古歌ノ歎入り舉リ及之前
後文勢ラ見キナリ △老子經善人不善人師不善人善人
資云師資トハ師弟ノ美ナリ △不知火トハ筑紫ノ施詞ニ
和歌數多ナリ △御内地保アツマシタウの時御内地作也
供セリ天子の事ドクノ御ひよちくわれの事ルセドく
あまくあめくする事アリ △蓮生坊ハ才高善ニ駢ヲ挿スル
美勢ノ仲ナリ △童子經セ入去不前歸師影 ●東坡詩
十年報莉水因云 △其昌春山モ入自記モ雲鎧法師ノ
俳集ナリ ●歌中八仙ニ長寧市上酒家眠云此詩李白
カ酒落ヲエナカラニ謫仙ノ起結ト知ニシテ元二祖望潮以下

ハ行快ノ事ナリ 室ニ支環ノ術アリテ純面ニ其人ヲ写出
セルル等ラ形容ノ絶妙ト称スレ △布壁賦著核既尽ラ
不盡盤狼籍云〇辞世ノ古文ハ兩説アリ其比ノ訣音古琴
ノリ也淨書の今ナリトモ圓一八三三二月二日ノ事
トモ尙工畢竟乞可作無違ノ意趣向ハ當用意即妙ト極ムレ
△往生傳如侍桂賈トハ臨終ノ字隱ラ云リ 傳灯錄
普化和尚下普化曰明日去東行遷化郡人祠卓送
出城而厲声曰今日葬不合青鳥伴客中四月
自啟棺出北门外振鋗入棺而逝郡人揭棺視
之已不見唯空中有磬音一云 △識文トハ宋米芾記
三字佛家三授記正云リ △涅槃經結之生值遇緣云
△墓誌文ハ金口未舌迅雷萬火天云ルハ字ノ謹文ナリ 指元ニ

金口木舌よ雲鎧鎧三木鉢ノ歎又ラ假テ天下二郎道ヲ船
行ク徇人喻ナリ迅雷ト法師ノ疾錐ナラ雲ト鎧トノ御醫ト
○ほ云けたゞて幸也文字錄アリハ神の語す所と定まるや
ヨリ舟車の所あくと詔と一か節や船子舟の遣行と
あるにあらばの後詔と化行ナリヒ然家子も行ク船
室近ありて西より東百人と扣帳よりもさへ御と
あまうる海軍とあらう國守國主之船路の軍事故義
の能儀とあらひあるまゝモソとモ下見ひるをひきされ
ぬ焉とまくすれを我とまくすれとまくすれを教養の
行へあく御行へとくとも御はれとまく漂て雲天
不吉と敬叔う車比轍と行ひゆどり人の軒もよ
々越前と佐多とす男も主ま孫の雲天せれとまく

キと行人の終よひ不命あらうと本朝文選よ雲鎧
は作う引傳とあげて车若の人とまくすれは伊津の
食敷と裏里とすふ男あらうて第の裏里あ
ト西若の人にかまくすれと車若の仲人の肝夷と
すくせ裏里と自称のひまくすれとまくすれと
こよれ徒あんまく今て同祀のトとよーとと今や
蓮ニとよーとと今やとオコアト御達梅ととオコア
とよーきれヘ顔面う卑の不幸とほくとと御難の
説經の内意と來一て船子庵の慶祝とまりま
るやうそれへは所の船子庵とねあるゆきとおあり
終あらうとと今やとよーとと御達梅の内傳と我若
の仕生と体生すれ御育種の功とほくとと生と死

到處の曉と暮つて堅貞立高の自在とすねへれり
酒色とあらへあらかく船貨の優遊とあれども
和済の源遠すむらき市中の大活をはらひて
ひの八仙の詩つるる酒中の大仙アミ神と玉也

祭之界万靈文

渡部狂

南無三界萬靈無貴乞無賤乞有緣無無
緣無從佛光莊之聖天至詩歌連俳之
亡者送旅霧蓬萊一牧而不厭獅子庵之
佗者不棄于抹香之臭乞不生於窟魂之

詔余旨謂詞之遊歎歷所謹旨所謂消晉
之贊和繩五倫一面通味也今夫謂懺悔之
大秘事乃有此度於文擇之選場而誰能
與評者之虛實也今歲閏狮子庵之戶而
欲摸例之草稿月忽有二人之客而鶴髮
之叟謂直有仙居黃泉之田謂博望司歷
博望直實麼評者曰而其面蕭敷直有
何樣評者頬而其容老矣率厥好思儻
之万卷則畢歸羅山窟之樓集亦磨上扉
鍵而阿雞融入於鑰穴而以如是我聞之

四字擴文殊普賢之智慧，顯觀音勢至之通力。寫其餘之天人，麼毫王麼下在涅槃像之繪。其後無_レ逢人，_レ島金子_レ無_レ圓儒門之妙法，則遠_レ。刪詩正樂，近_レ至自擇之論語，而以_レ述而不作之四字，竊比於我老數與者曰：竊_レ曰：我今_レ家_レ輕給一代之虛實，則_レ人達者認例之實字，而_レ至指_レ商大夫_レ六_レ左_レ與_レ彭_レ省_レ寓_レ二人_レ之面數，而_レ謂_レ神_レ變_レ權化_レ之師。布哉儒家之七師，麼私門之七佛。麼可知有名無相之證據人也。

花_レ一言芳談之不事欠無財_レ，_レ窮_レ寐_レ不為起_レ，_レ尽_レ非優而不包_レ，文探一部之虛實，令懺悔_レ字_レ有_レ繆_レ之所_レ，矣懺悔_レ余_レ有_レ誘引滅無量罪，與哉初謂_レ佛諦之馳走，_レ不_レ令素麪_レ不_レ飾_レ。園子_レ不_レ漢茶_レ者入_レ選_レ名_レ花輪_レ達而荼_レ瀆_レ者，面_レ之減吹_レ才_レ也。斯言則乘_レ佛謂_レ孔門之一藝，居謂_レ叔_レ年老家_レ之口過_レ居花_レ味_レ一體_レ万用_レ，則_レ冥_レ萬法_レ一理。與好此故俳諧_レ者，令贊_レ談笑_レ，有諫笑_レ言，有道了_レ也。

立去言詣之趙有譏虛認宣人之假令抑
下我身而直人之厚履共言則爲似瓦器
置銷而振舞針之和物厚在有者認一言
之實而不知万物之虛故也不宣之實與
不虛之虛者兩厚之道一致之秘法摩哉
乾中佛諦師有常教搜仙家立迂詐崩儒
門之真言譬則知無大名之仰人之不惜
孔子不泥叔也譽花豎毀卑知其
日其時之变則忖檀那之撓繩而欺其事
此事欵是以論詔不廢謂君子可歎居倭

惣而癮叔迦孔子之文而令穿鑿證人之
名判則爲似折檜林咄之冲而詰言棄之
散率以耳於聞万卷之表以心知一守
囊了哉干時卓有仙塵博望司麼矣々
合而不諱一部始終之宵折急度演大遺
之一礼而博望有乘李子之集則卓有者
乘莊子之牛而飛去西之太虛了矣卓有者
流效源供養之摸樣而和兮漢兮連詩
兮誦歌兮斯有吊聃七之跡歷今將所存

此世人^モ麼慰^モ參文^モ而朝白^モ之露^モ稻妻^モ之敷^モ不^{トナム}各^モ狂言綺詔^モ與也^モ

○註曰△一言芳談^モ聖光上人詞^モ迦世^モ有^モとあきらめずなげるや^モとも^モいてまくらむのや^モあくモ△佛優^モ古語拾遺^モ取意^モ前^モ出^{カタ}△悲華經^モ懲愧懺悔滅無量罪^モ△花輪處^モトハ茶多^モ立^{カタ}ノ仰ニテ義濃ニ並長ノ名産^モ△論詔^モ言詔^モ寧我子貢^モ四科^モ中^モ藝才^モ△史濟和尚傳^モ優孟^モ常^モ以^カ談笑^モ詫諭^モ優旃^モ善^モ矣^モ莫^モ言^カ然^モ今^モ太^モ道^モ△涅槃經^モ佛法^モ附屬國王大臣^モ有力^モ擅^カ刑^モ△阿含經^モ預知^モ彌^モ接^カ此^モ

段八諫君有五事五說諫唯度主而行之ト云ル老子家詔
ノ取意ナリ△論詔^モ君子可^シ而^モ敗^ス不可圖^スト^モ寧我子貢^モ言
ノ巧^モ責^カルナリ△遊敵^モ六双串^モ詞^モ物^モ諱^モ遊^モ女^モ云
ヘリ^モ捨^カ不^シ佛^モ諦^カ師^モ以下^モ說^カ諫^カノ意^モ汲^カテ^モ復^カノ武帝^モ
諫^カタル事^モ方^モ羽林^モ卒^モ面^モ嚴^カ云^カリヤ畢^カ竟^カ八角^モ
羅^モ嵩^モナリ^モ阿難^モ迦葉^モ金^モラマ乘^モ鑰^モ障^モヨリ^モ這^カ入^テ
仙^モ如^カ說^カ法^モセシ^モ大眾^モニ^モ提^カアハ如^カ是^モ我^モ聞^カノ發^カ詔^モ置
ケリトソ速^カ而^モ不^作作^カノ詩^モ宜^カラ寮^モスレ△論詔^モ帝^モ乃^チ叙^カ旨
傳^カ禮記^モ刪^カ詩^モ正樂^モ△論詔^モ速^カ而^モ不^作信^カ好^カ古^モ也^モ陽^モ
比^カ於^カ我^モ充^カ敦^カ△註^カ充^カ敦^カ商^モ賢^カ大夫見^カ大戴禮^モ接^カ至^モ
儒^モ子^モ有^カ其^モ書^モ充^カ不^カ私^カスヨリ其^モ人^モ首^モ魯^カ充^カトス總

テ玄子ノ費ヨシ山崎をへ一貫抄金紀トせ本トヲ引テ
左鼓ハニ人ノ寓合ナリモ子ト乾祖トノ面影ニ寓ラズ莫ラ信
スルノ證文トフ△孔子ニ七八人所ト云イ教迦ニ七弘ノ授記ト云ア
ハ總テ諸經ノ取意ナリ細峯ニ暇アラス△檀林ト難ロアシテ
エリ宗因夙ノ諱諧ヨリ天和ビノ常説ト成リ△傳詔拾ナム
血茄ヲ唐牛ト訓ス茄子^{キヤス}新^{コス}子トハ禪錄ノ詞續ナリ△傳年
供養ハ訊物ノ名ニテ淳中君右ラ始トシ六十余帖ノ寫各ラ
奉^{ヨセ}奉^{ヨセ}石山ノ湖水ニ供養セシ様ナリ△其詞も古の字を綴
書の象づれりあくやかとあり△或云ね言綺語と云
於て筆式御う條のせとそもナシトセアリ
○遂云げみを全く諱諧^{ヨセ}文擇一部の起句^{ヨセ}と
傳書仰持^{ヨセ}の新論とが△傳文深^{ヨセ}哉めに式と易ミ

タマシ自モカホ他モモアモリテ翁家と連れて
ゆく儒仰のばな^{ハナ}て一石達三のまちちら^{ハナ}と見事^{ハナ}霊臺
の自讚^{ハナ}ト仰^{ハナ}塔^{ハナ}のうやうやうと^{ハナ}言説^{ハナ}可用
とあん^{ハナ}と文擇^{ハナ}と當^{ハナ}とモナシ^{ハナ}とば^{ハナ}文^{ハナ}
ね言^{ハナ}とモナシ^{ハナ}一部の跡^{ハナ}とモナシ^{ハナ}洋^{ハナ}吊^{ハナ}
の二篇^{ハナ}とそれ終^{ハナ}至^{ハナ}行^{ハナ}たる文^{ハナ}の死活^{ハナ}とモナシ^{ハナ}
優^{ハナ}情^{ハナ}の哀愁^{ハナ}とモナシ^{ハナ}行^{ハナ}たる文^{ハナ}の死活^{ハナ}とモナシ^{ハナ}
て我^{ハナ}あふ^{ハナ}夙^{ハナ}のまき^{ハナ}とモナシ^{ハナ}附^{ハナ}夙^{ハナ}のまき^{ハナ}とモナシ^{ハナ}
とモナシ^{ハナ}前^{ハナ}此^{ハナ}のまき^{ハナ}とモナシ^{ハナ}附^{ハナ}夙^{ハナ}のまき^{ハナ}とモナシ^{ハナ}
はとて一帆万用の調^{ハナ}む^{ハナ}一方は一帆^{ハナ}の故^{ハナ}
む^{ハナ}南^{ハナ}す^{ハナ}船^{ハナ}綺^{ハナ}詔^{ハナ}ア^{ハナ}ト^{ハナ}十^{ハナ}度^{ハナ}の
船^{ハナ}渡^{ハナ}ア^{ハナ}ト^{ハナ}十^{ハナ}度^{ハナ}の和^{ハナ}漢^{ハナ}文^{ハナ}藻^{ハナ}と假^{ハナ}名^{ハナ}と真^{ハナ}名^{ハナ}

通用といひあつてちゞり我まの手話あれ
和漢と一枚の繪圖みて柳子庵の文庫より
写すて爾雅篇海めむかうともうそと
伊吕波龍一冊よりにやの増とありもし

書林

洛陽寺町押小路
橋屋治兵衛梓行

享保十二年秋九月如意珠目

佐山文庫

